

初期山城としての高子山城について

出内博都

一、在地支配の方形居館址の発展

律令制が崩れ、荘園制（公地は国衙領）が一般化してくると、荘園における荘官、名主、国衙領における国司、田堵名主などいずれも徴税請負人としての性格を強め、行政のルールにのった政治よりも、力によった支配権の拡大、深化を求めてくる。それまで、荘官の住宅が役所を兼ね生活と公務と生産活動が一体化した館が次第に重装備をするようになってくる。そうした過程で、出現してくるものが方形居館址と称せられるもので、いわゆる長者屋敷伝説地や平安から鎌倉武士の館に多くみられ、一般に平地又は微高丘陵の先端部に位置する。土塁や濠で囲まれ百米から百二十米位の方形プランを持ちその形状から土居とか堀の内とか呼ばれたものである。種々の絵巻物などを見ると住宅としての母屋のほかに生活に必要な馬屋、侍廓、倉などの付属室があり、その館をめぐる佃、門田、正作、垣内などと呼ばれる免田が存在する。こうした方形館は中世を通じて生活面と在地支配の中心として戦国末期まであまり変化することなく存続した。戦国大名の居館として超大規模な武田氏の「躰躰ケ

崎館」なども出現する。こうした居城と在地支配（農耕作業の一部を含めて）を一体化させるものとして関東地方には農耕水利との関係で「谷田包括式館」という谷間もしくは谷間に挟まれた丘陵先端部に位置する一類型を示すものもある。（西ヶ谷恭弘著、城郭）いずれにしても居館と役宅と要害とが素朴な形で一体化したものが、規模の大小は別として一般的傾向であったと思える。

二、悪党、足輕の発生と山城

鎌倉御家人に象徴される惣領制在地支配の形式は方形館や谷田包括式館に代表される。しかし惣領体制の矛盾（分散領有、分割相続を含む）文永・弘安の役をめぐる世情不安と貨幣経済の進展など生産体制・経済構造の変化から新しい生産単位としての自然村落の成立、新しい階層としての悪党の出現、新しい集団原理としての一揆形式の集団も出現する。こうしたものが相互にからみあって、既成の荘園、郷・村の枠を破って広域経済圏を形成し、蒯田狼籍、押込みなどのルール違反も行ない、歩兵として足輕的武力と集団戦法も出現し、それらの拠点としての山城が出現

してくるのである。弘安三年（一二八〇）伊賀黒田庄の住人清定以下が路次をふさぎ城郭を構え東大寺に抗している。その他嘉元四年（一三〇六）丹波宮田庄の前公文職西ら三百人が悪党化し城郭を構え六波羅の遵行使と戦う（大山村誌）など枚挙にいとまがない。元弘の変における楠正成の赤坂、千早の城は有名である。悪党行為が城郭を必要とした理由は①六波羅からの討伐軍に対し楯籠る必要と、一揆集団の寄処 ②狼籍行為に起因した十三世紀末以降の農村の過剰生産物の隠匿の場所 ③惣領制崩壊にみる御家人武家社会の新たな地域支配をめざす拠点としての三点にしばられよう。

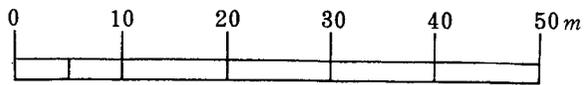
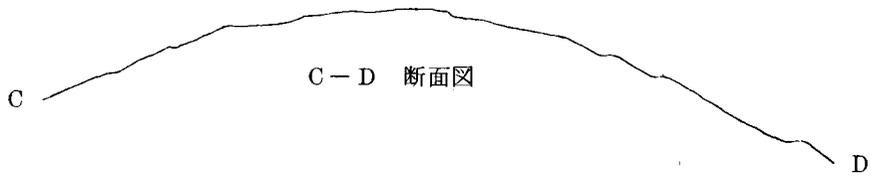
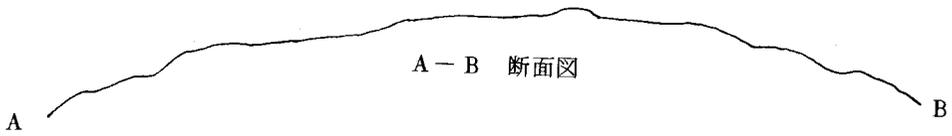
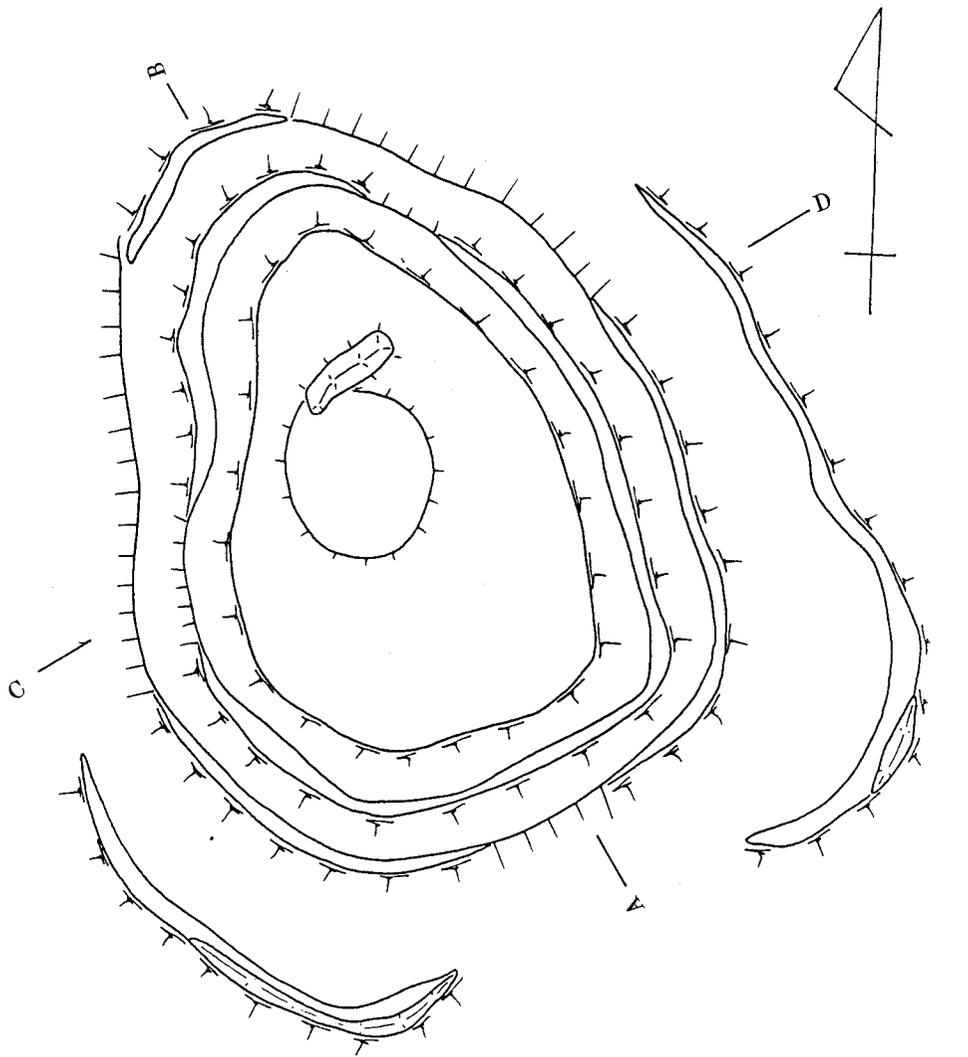
ことに南北朝争乱期の前段階としてこの時期にわが国の尺度でいう城郭の存在が確実に西国の荘園社会で一般化したといえよう（西ヶ谷恭弘著前掲書による）然しこうして本来は逃げの城として成立した山城はその後、荘官、御家人武士が土着の国人として領主化していく過程で、手が加えられ要害堅固なものに変質していく。こうした中でごく初期的な山城としての高子山城の概略を紹介しよう。

三、初期山城としての高子山城

高子山城は神石郡油木町大字安田字河内谷にあり、西備名区には高古山城宇部和泉守とあり、備後古城記に高コ山宇部和泉守とあり註に高古山とも出ている。神石郡誌にもほぼ同じようなことが出ているが、和泉守が貞治三年（一三六四）に同城の西麓に永聖寺を開基しており、その永聖寺の記録には宇賀和泉守以下三代の法名を伝えている。現在、地もと

では宇賀を称する家が家号「でい」として伝っている。（但し「でい」の当家は戦後死滅、分家は存存する。）永聖寺は臨済宗永源寺派の中本山である。由緒によれば「建武觀応の間、近江永源寺開山圓応禪師寂室元光大和尚の韜晦住庵の地たり。此地に宇賀和泉守城を築きて居り深く師に帰依す。貞治元年（一三六一）三月十八日圓應禪師の弟子にして法嗣たる智庵元周を請いて開山となり、隣松山永聖寺と号す」とあり寂室が福山の永徳寺（長勝寺）を開基し二十五年の長きに亘って園中をまわっており、その間靈山星居山へ登るため安田に住したことが福山志料（巻一〇）に出ている。永聖寺は城郭型の寺で城の西南の境界に備えたものと思える。宇賀三代のうち誰が建立したか不明であるが築城はこれ以前であるので一三世紀末から一四世紀へかけてのもので、極めて初期のものと思える。調査カードにあるように円郭式の単郭である。頂上の第一郭は東西約十三メートル、南北約十五メートルの円形で北端に長さ十メートル高さ四〇五センチの土塁状の高まりがありその第一郭と若干緩傾斜をもって東西三十メートル、南北五十メートルの広場があるが、表面は必ずしも平坦ではない第二郭といえるものであろう。これを囲んで帯郭が廻っているが広い処は五メートル、狭い処で二メートルと不規則である。然しこれは帯郭というより、空濠であった可能性が高いように思える。

掘上げ式の空濠と簡単な土累状の土盛りが想定される。この場合空濠は薬研堀より毛拔堀の可能性が強いように思う。いずれにしてもトレンチ溝をいれる必要がある。この二条より下に数メートルの比高で東側に



神石郡油木町安田 高子山城跡実測図

約九メートルの帯状の郭、西南側に同じく約五メートルの帯状の郭がある。巾が狭いので郭というより防御用の土塁の崩れたものではないかと思える。両方共部分的に土塁跡らしき盛上がりが見られる。この城が南北朝期に宇賀氏の名を伝えるのみで、その後使われた伝承もないのでこゝうした古い形が残ったものと思える。現地に残る古い地名から宇賀氏の村づくりのあとを偲んでみよう。

三、城と垣内と名田

現在の安田は北流する安田川の谷と、同じく北流する阿下川・野稲谷川の谷の二つからなっているが、これは元禄検地の時、安田村と西の谷の野稲谷川沿いの畝畠村を合併したもので、中世は安田川及びその支流の谷だけであったと思える。南北に長いこの谷の北端に高千山城があり城の北は大きな山をこえて深い狭谷で油木の権現山城と対している。城の南西麓に永聖寺を配しその二百米あまり南の尾根（畝畠村への峠）に「かんぬき」の地名がある。かんぬきの南山上に「二ツ御堂跡」という地名があり多数の宝篋印塔と五輪塔があり永聖寺の前身と伝え宇賀一族の墓と思える。城の南麓に「比丘尼屋敷」がありその前の小丘の東端に「土居」がある。土居の北隣に「井ノ元」（現在いもうとと呼んでいる）という家号で宇賀を姓とする家がある。南北約二軒、東西約一軒の谷を南から、上垣内、中垣内、下垣内の三区に分けて支配していた。川が北流しているから南を上といっている。垣内は元来は田畑並びに附属林野を垣で囲むことを意味した古い語である。垣で囲むといっても、実際は

樹木を利用し四囲を定めたものである。次第に垣内は田堵、名主の経営地など特別な地の名称となり更に領域の拡大、新開などによって重要地に一族などを配して管理させる家や、やがてその管理区域を示す村の中の集落をも示す語へと発展し、近世では分村を指す場合もある。この内が訛って「があち」となり文字は川内・河内・開地「〇〇が市」などなどとして現在に伝わっている。勿論現在のすべての「があち」が中世のものではなく一軒の「があち」があるとそれをもとに上・下とか東・西とかを冠して新設された屋号も多いと思える。安田の現在の行政区で上区といわれる処の大部分の土地台帳上の地名は上河内になっており、上河内屋敷跡と伝える処も残っている。現在の中区は村の中心で学校や鎮守もある地域であるが、この地区の土地台帳上の小字名は時正谷である。一時代古い名田名がそのまゝ残っている。中河内という家も明治まではあり、その一族が「中上」の家号で任んでいたが今は絶えている。その屋敷、墓も荒地として残っている（中河内は筆者の曾祖母の出所、幼時はよく訪れた）この時正谷には旧道に沿うて房元、房宗、頼元（或いは米元）など人名の家号をもつ古い家が現存している。古い道は川沿いと西の谷（日南）を上って畝畠へ越しておりその途中に横穴式石室をもつ古墳があり附近を「塚風呂」と呼んでいる。附近に「塚迫」「塚元」という家号の家がある。然し古墳は以外に少なくこの二軒の谷に三つしか判明していない（二つは破壊）。城の東麓に下河内という屋号はあるが、城や寺のある下区は土地台帳上の字名は殿河内又は河内谷になっている処が多い。城の東南の台地上の小集落を野呂河内と呼んでいるが

これは台帳上の地名にはなっていない。鎮守は亀山八幡と呼んで保元年間の勸請を伝えているが詳細は不明である。この宮山は安田川、鍋谷川の合流地点にある独立丘で三方の谷を見渡せる要害の地で、高い石垣をもつ城郭形式の社である。鍋谷川沿いの谷には家はないが、最奥部に、かじやがあったと伝えられ、田の湧水に金氣（きんき）の錆色が浮んだり、附近の山からかなくそなど出るので採鉄の谷であったと思える。その谷の入口に八幡社を配したとも考えられる。この谷に「いばの坪」「鍋谷住還」の地名を伝える（検地帳）も現地は不明である。下河内から谷を距て、北河内の名も伝っている。城山の北方の谷、権現山に対崎する中山谷に「城殿」・「行司」という地名があり、川沿いに北から入る勢力に対する防衛施設がしのばれる。中山谷には戦後まで二軒の家があったが電灯のない生活をしてきた山の深い谷なので木地師の里であったのか、「キシ畑」の地名を残している。上河内地区で南西にある与那志という谷から北東流して安田川に合流する川沿いに「ふきや」とか「かじや床」など採鉄をしのぼす地名もある。中区（時正地区 中河内地区）で東から流入する戸谷川の合流点に「太鼓の丸」という地名があるがこれは長い南北の谷の丁度中間なのでふさわしい地名と思える。

南北に長い谷の北端に城を築いているという占地の意図がわからない、中河内地区にふさわしい地形の山は多いように思えるが、霊山星居山への道を考えると現在の永聖寺の谷が一番便利である。案外そんな処に根拠があったのではないだろうか。